

## SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム（シナリオ創出フェーズ）

### 令和3年度採択プロジェクト 事後評価報告書

2024年（令和6）年3月

研究開発プロジェクト名：人工知能を用いた障がい者の就労可能性の向上に資する、DX協働基盤の開発と社会実装のためのシナリオ創出

研究代表者：塚田 義典（摂南大学 経営学部 准教授）

協働実施者：曾川 稔（太陽の家 ICT推進担当）

実施期間：2021年（令和3年）年10月～2023年（令和5）年9月

#### 総合評価

一定の成果が得られたと評価する。

本プロジェクトは、社会福祉法人太陽の家で就労する障がい者が大学生と連携してAIアノテーションという新しい就労機会を獲得できることを実証し、多地域展開と社会実装のための具体的な運用モデルを策定するものである。

これまで働くことが困難であった障がい者に働く機会を提供するという目的に対して有効なアプローチであり、若者の積極的関与や、NPO法人等の設立など多地域展開を促進する体制づくりを提案されたことを評価する。一方で、AIアノテーションという業務において障がい者が発揮できる優位性が示されなかった。今後のAI技術革新やAIアノテーション市場の変化を踏まえながら、多様な福祉施設の巻き込みと安定受注ができるチーム体制の構築を期待する。

#### 項目評価

##### 1. 目標の妥当性

目標は妥当であったと評価する。

「障がい者の働く機会の創出」かつ「創造的な就労機会の創出」に資する目標設定、および障がい者の就労機会としてデジタル時代に必要なAIアノテーションを導入し、太陽の家での可能性実験を基に多地域展開と社会実装のための具体的な運用モデルを考案することは、本プログラムの趣旨に照らしても妥当であったと評価する。今後、障がい者雇用の多様性や実践の豊かさという側面から他の事業所を対象にすることや、研究代表者の所属大学の学生以外にも取り組みが広がることを期待する。

##### 2. 研究開発プロジェクトの目標の達成状況および研究開発成果

プロジェクトの目標は達成されたと評価する。

障がい者のDX分野における活躍の場としてAIアノテーションを取り上げPoC（概念実証）でも結果を出し、またコンテストにも積極的に応募し評価を得るなど、具体的な進捗と

成果を評価する。また「DX 協働基盤の開発」「運用モデルの開発」などにおいて AI モデルの試作に必要なデジタルデータの収集や障がい者の特性調査など KPI は達成されており、参加した障がい者からも就労への手応えが得られるなど可能性試験として評価する。今後は AI モデルの販売・事業の横展開等を含めた運用モデルの開発やシナリオ作成、評価のための道筋を描くなど、成果の実装・展開に向けた取り組みを期待する。

### 3. 研究開発プロジェクトの運営・活動状況

プロジェクトの運営・活動状況は、妥当だったと評価する。

プロジェクトの目標達成に必要な研究者や実務家の巻き込みがなされ、プロジェクト内のグループの協働が適切に行われるようマネジメントチームとの協議・合意の下で目標や計画の見直しが適切に行われたと評価する。協働実施者の変更についても障がい当事者寄りの活動に方向転換したことなど、実情に応じて柔軟に対応したことも評価する。一方で、研究代表者とそのゼミ生らが活動の中心であり、属人的なプロジェクトとなっていたように見受けられる。今後当事者である障がい者の共創的・主体的参画、並びに、障がい者の就労状況の改善に危機感や現実的な実践体制を持つ事業者との連携が進むことを期待する。

### 4. プロジェクト終了後の事業構想(研究開発成果の活用・展開の可能性)

プロジェクト終了後の事業構想は、描けているが限定的と評価する。

定常業務の獲得に向けた案件の方向性や、NPO 法人等の設立など多地域展開を促進する体制づくりが提案されており、その実現可能性も期待できる。一方で報告書の記述にもあるように、本研究成果の波及範囲が研究代表者及び協働実施者の属人的な域に留まっているという認識から脱却する必要がある。協力支援体制をさらに拡大するために、AI アノテーション分野での障がい者活用に対する周知広報等にも力を入れ、社会実装、事業展開において必要なリソースやステイクホルダー、共創・協働のパートナー等の構想や関係性構築についてさらなる進化を期待する。

### 5. その他

なし